ISSN 0286-1968

河上肇記念会会報

NO. 24
1986・9・1

一九八六年度総会御案内

酷しい残暑もようやく過ぎました。恒例の本会総会のご案内をお知らせいたします。

今年は全集編集にご苦労された岩波書店の米浜泰英氏を講師にお招きし、「新聞にあらわれた河上肇像」と題して、ご講演を頂く予定です。

多数ご参会下さるようお願い申し上げます。

一、日時　一九八六年一〇月一九日（日）

　　午前一一時～午後三時

一、場所　法然院

　　（京都市左京区鹿谷御所ノ段町二四）

　　会場案内図（二〇ページ）参照

一、臨時会費　五、〇〇〇円（会場費、昼食費を含む）

同封ハガキにて一〇月五日までに出欠のご返事を賜わりますようお願いします。（お手数ですが四〇円切手を貼って下さい）。

目次

一九八六年度総会御案内 …… (1)

特集　河上肇没後四十周年・全集完結記念のつどい

集会記 …… 紀平龍雄 (2)

所感 …… 寿岳文章 (6)

記念集会に …… 塩田庄兵衛 (7)

河上肇と天皇制（講演） …… 岩井忠熊 (11)

全集にみる河上肇の人間像（講演） …… 杉原四郎 (21)

河上肇と大阪 …… 杉原四郎 (37)

人間河上の再考を …… 川勝傳 (41)

河上肇と中国文学（講演） …… 一海知義 (49)

表紙写真　記念集会大阪会場、撮影　石井　進氏

〈特集〉河上肇没後四十周年・全集完結記念のつどい

集会記

河上肇没後四十年・河上肇全集完結記念のつどいは、五月十日に京都で、五月二十四日に大阪で開催されました。講演の内容は次に詳しく掲載してありますから、集会のあらましと集会後の記念パーティの模様を簡単に報告します。

京都会場は五月十日、五月晴れの新緑の美しい衣笠の立命館大学末川記念会館で開かれました。会場を何処にするのか事務局でもいろいろ検討の後、河上ゆかりの京都大学がよいが、ここは生誕百年の記念集会の時も使用しており、今回は会員の新規開拓をも兼ねて別の適当な場所はないかと模索中に立命館大学の塩田庄兵衛教授から末川記念館はどうかとのお話があり、教授の御苦労奔走ならびに立命館大学の御好意、とくに会館の井川定雄氏の御協力でこの会場が使用できるようになりました。思えば末川博先生は故人とはいえ河上の義弟であられ、

かつ当記念会の初代の代表世話人であり、また全集の監修者とあれば結果的に最適の所に落ち着いたと言えましょう。会場には同大学所蔵の河上肇遺品が展示され、開始時間前から訪れはじめた参会者が熱心に見入っていました。その他に河上肇音読会、大学生協が河上関係の書籍を販売し、著者の塩田先生・杉原先生にサインを乞う光景も見られました。さらに会員山下孝次郎氏から差し入れられた紅白の「河上まんじゅう」が先着百人に配られ、開会前から会場は和やかな雰囲気に包まれていました。記念会からは会報前号等を配布しました。

まんじゅうがなくなった頃、塩田教授の挨拶（および司会）で記念すべき集会は始まりました。司会は終始、品位とユーモアに満れ、会場を引き締め、和ませるものでした。まず初めに立命館大学岩井忠熊教授の「河上肇と天皇制」の講演がありました。今まであまり論じられることの少なかった新しい角度からの講演で参会者の目を開いて下さいました。次にあめんぼ座西垣登子氏による河上の作品朗読。「自叙伝自画像」の一節・「辭辞世」・「言うべくんば・・・・」・「味噌」等の詩がバックミュージックの流れる中に静かに、しかし力強く詠じられ、「ひとやなる・・・・」からはじまる夫妻の相聞歌で最高潮に達したところで余韻を残して休憩になりました。

遺品展示室と書籍販売コーナーが賑わった約十分の休憩で再開。この時、会場の一人から挙手があり、先刻の詩「味噌」の舞台である味噌屋「関常」の代替わりした御主人とのこと。この詩に関わる話がすこしありました。後半の講演は元甲南大学学長で当記念会代表世話人であられる杉原四郎先生のお話で「全集にみる河上肇の人間像」。日頃の温厚な話ぶりもこの日は永年苦労された全集完結の安堵感か、あるいは思い出の京都での講演というお気持からか弁きわやかでユーモアに満ち、しかし終わりに近付くにつれて熱を帯び、「もうあと一分で終わります」の後に五分も話される熱弁でした。最後に事務局代表大門英太郎氏の挨拶。記念会の紹介と入会の勧誘・二週間後の大阪集会の案内・河上関係書籍販売と遺品展示の紹介・河上まんじゅう由来の説明・六月に京都府立総合資料館で開催される遺品展の案内・まもなく開かれる記念パーティーへの招待等々があり、これでいよいよ最後ですからと念を押して「長き足　楽に座れと我妹子が　縫うて待ちにし　この座布団よ」と二度吟じられると、この日最大の拍手が沸き起こりました。参会者約

百七十二人。

二十分の休憩の後、場所を階上に移して記念レセプション。これには羽村二喜男御夫妻・孫娘鈴木御子さん・さらに岩国からは河上荘吾御夫妻等のご親族、岩波書店の中島氏、末川先生のご令息清教授、哲学者船山信一氏など約五十人の賑やかな、しかも感銘深い話が続くパーティーでした。友好と談笑のうちに名残を惜しみつつ七時過ぎに散会。

なお、最初に掲載した寿岳文章先生の「所感」はパーティーの席上、草川八重子氏によって代読された。

大阪会場は梅田の好文倶楽部で五月二十四日の午後二時開会。京都での盛会はあるていど予想されましたが、大阪は何分にも河上のなじみが少なく参加者数が予測できず、かって当会でも使用したことのあるこの場所が交通の便も良いということで決定しました。結果前に両会場における盛会は会員各位のご協力の賜ですが各新聞社の協力も看過することはできません。五月七日京都新聞（塩田先生「河上肇没後四十年」）・八日毎日新聞（小嶋麒生編集委員「よみがえる河上肇」）・二十一日朝日新聞（杉原先生「河上肇―むかしといま」）およびこの記事の反響の結果である二十四日朝日新聞の「若き河上肇の姿ほうふつ」の記事等々です。このためか予想以上の参会者で定刻前に百二十の座席が満席になるほどの盛況でした。当日は大門氏所蔵の河上先生から贈られた書二点・全集三十六巻も展示されました。会報の配布・河上まんじゅう・関係書籍の販売は京都会場に同じ。

定刻二時、大門氏の司会で開会。まず始めに代表世話人杉原先生の挨拶があり、特に河上肇と大阪との関連を強調されました。つづいて南海電鉄会長川勝伝氏は没後四十年の意義を懐かしさの中に強調されました。

一九七九年の河上肇生誕百年に際しNHK故西川勉氏が制作して好評を博した「テレビ評伝　河上肇」が時間の関係で六十分に短縮されましたが、画面はビデオプロジェクターで六、七倍に拡大されて上映されました。この間、暗い会場にはささやきと溜め息と言うか嘆声が漏れ、終わると期せずして拍手が湧き上がり、そこで休憩になりました。私事になりますが私も何度かこのビデオは見ました。その都度に感動を覚えます。しかしこのほどの強さを感じたことはありません。河上に集う人々とともに気だ放でしょうか。

この頃には来会者は百七、八十人にも達して座席は不足どころか会場に入ることも出来ず、締めて殺到する人

もありましたが（誠に申し訳ありません）、講演の始まる頃はまさに立錐の余地なし。講演は神戸大学一海知義教授の「河上肇と中国文学」で、先生は河上が漢詩に託した晩年の心境を例の高級ユーモアでプリントと黒板を利用して平易に解説されました。閉会の辞は事務局長の大門氏。今回は前回に比し短時間ながら、会場の狭きと準備不行届を何度も謝罪されながらも、「長き足を・・・」の詩吟の時には一段と熱がこもり、氏の眉には涙があったのかもしれません。四時四十分、多くの人にともどもの思いを残して無事散会。後で書店の人に聞けば関係書籍はほぼ完売に近いとのことでした。直ちに隣の部屋に場所を移して記念レセプション。今回は二十数名の参加ながら形式めいたこともなく、参加者全員が河上との関わりを語すなど、すべてが終わったという気持からか終始打ち解けた会合で、七時半に終了しました。

京都会場の反省の上に大阪では参会者に簡単なアンケートをお願いしました。百二十枚作成して六十一枚回収しました。今後の参考の為にその結果を簡単に報告します。実態は、乱暴ですがその三倍程度と考えても良かろうかと思います。

・参会者　会員一〇　非会員四八　不明三

・住所　大阪二五　兵庫二八　京都三　その他四　不明一

・性別　男五二　女七　不明二

・集会を何で知りましたか（複数回答あり）

会報一〇　新聞四〇　ちらし三　その他一二

会員はほとんどが会報で、非会員は大半が新聞でですが、その他というのは知人（会員か？）の紹介というのが多いようです。

・感想は「感動した」・「印象に残る」・「力強さを覚えた」・「漢詩に興味を持った」等の好意的なものがほとんどでしたが、「会場が狭い」・「喫煙がない」・「河上肇ほどの人物の記念集会に参加者の見識もりがない」・「会場が蒸し暑い」等の回答もありました。後で指摘されて気付いたのですが、せめて年代だけでも聞けば良かったと思います。しかし全体の印象ではやはり若い人は少なかったようで、四十代以上の人が多く見られました。

紀平龍雄